

故郷「おんせん県大分」を 全国に誇れる県に

大分県行政医師として2年目になりました。それまでは総合診療医として県内のさまざまな地域に勤務していましたが、もともと公衆衛生に興味があり令和3年度より行政職として勤務しています。振り返ると新型コロナウイルス感染症のことばかりになりますが、今までの自分を振り返るとともにそれ以外のこともお伝えできればと思います。

幼少期〜大学時代

私は生まれも育ちも大分県で、豊後高田市という小さな市で育ちました。両親が医者というわけではなく、小さい頃から医者になリたかったというわけでもありません。小学生の頃はすし職人になりたいと言っていたようですが、私自身が生ものをほとんど食べられないので、すぐに諦めたようです。なお、今でも海産物はほとんど食べませんが、幸い九州はお肉もおいしいので食事には困っていません。その後、身内に看護職が比較的多くいた影響で、医療の分野に

興味を持つようになったと記憶しています。

平成19年に自治医科大学に入學しました。大変失礼なことですが、入学当時は公衆衛生医師(行政医師)という存在さえ知りませんでした。学年が上がりが公衆衛生分野を学んで初めて認識した気がします。ただ、そこでも公衆衛生を将来の専門分野としては、あまり考えていませんでした。というのも、当時の私はバスケットボールに熱中しており、部活動を十二分にするために勉強をする(試験を落とすと部活に支障が出るため)といった不純な理由で勉学に励んで

を入れたりしていました。臨床医の最後の日となった令和3年3月29日も朝から忙しく勤務して、気付いたら病院を後にしていました。特に心残りもなく、今後使用しなくなる白衣もすぐに処分して数日後から始まる行政でのスーツ生活に備えました。

そして、4月1日より行政職務となりました。新型コロナウイルス感染症の流行と重なり、この年の業務を振り返ると99%が新型コロナウイルス対策という具合です。朝から検体採取や入院調整、状態が思わしくない患者への状態の確認、保健所管内における感染症患者の入退院情報の更新、クラスタ発生医療機関・施設への現地訪問、医療機関や施設への新型コロナウイルスに関する説明資料の作成など、忙しい時はあつという間に夜を迎えていました。しかし、忙しい中でも、育休を取らせていただいたことや、子どもの体調不良時も休みを取りやすくしていただいたこと、時間外労働の配慮などをしていただきました。そのおかげで、医療機関で医師として勤務していた時よりも家

にいる時間が増え、子育ての大変さや世の母親(父親も)の偉大さを痛感するとともに、非常に大切な時間を過ごすことができました。

今年度から「健康づくり支援課」が主務となり、「東部保健所」で兼務しています。大分県は令和3年度調査で健康寿命日本一を達成し、健康づくり支援課を中心にさらなる向上を目指し、日々職員一同が業務に追われています。健康づくり支援課の業務は多岐にわたっており、健康寿命延伸推進事業や歯科衛生、食育、糖尿病対策、たばこ対策、原爆症、臓器移植、がん・難病対策など、挙げればきりが無い広範囲な業務をカバーしています。

各事業で医学的な判断が必要な場合があり、総合診療科での知識や勤務経験を生かし、微力ながら貢献しているのが私の現状です。しかし、ゆくゆくは大きな力になれるように日々精進しています。一方、東部保健所では、現在、当然ながら新型コロナウイルスに関する業務がほとんどですが、それに加え、結核、薬剤耐性(AMR: Antimicrobial Resistance)対策など、主に感染症に関わる業務

いました。ただ、どの分野を学んでも一つの専門分野を極めたい!という考えにはならず…。そういった理由から卒業する頃には多方面にまたがる公衆衛生に興味を持ち始めていました。さらに、ご存じの通り自治医科大学ではすべての都道府県から入学者が集まるため、入学後に郷土愛に目覚める者も少なくなく、私は故郷の大分県をより良くしたいと思うようになっていました。

研修医〜臨床医前半

研修医になる頃には「臨床医は自治医科大学の義務である地域従事期間しかない!」その後は公衆衛生分野で働く!という確固たる意思をなぜか持っていました。研修医時代には世にも珍しい? 保健所研修に向いたこともあり、地域勤務が始まった後も、不定期ではありますが保健所や県庁で研修

も行っています。

おわりに

今現在、本シリーズ「私にも言わせて!」を行政医に興味・関心がある非行政の先生方が読んでいただくと期待して、若輩者ではありますが私からのメッセージを記載させていただきます。

医学的な専門性についてはあるに越したことはないと思いますが、必須とは思いません。理由は分野が広過ぎて、すべて深く把握するのは事実上不可能だからです。ただ、医師でなければできない業務や専門性が事業の推進に非常に役立つこと、医療機関との会議や連携の際、医師であることで「話が早い」ことも多々あります。今までの臨床経験が生かせること、また、今まで臨床では経験しなかった医学の一面に出会えることなど、新たなやりがいもあります。

ご興味があれば、ぜひとも都道府県庁等に連絡いただきたいです。特に、温泉もあり、食事もおいしい大分県は行政に來られる先生を大歓迎いたします! 私でも差し支えございませんので、ぜひご連絡



大分県福祉保健部
健康づくり支援課主幹(兼)
東部保健所地域保健課主幹
渡邊 英之

平成25年自治医科大学医学部卒業。
総合診療科医師として地域医療に従事。
令和3年4月から行政職勤務となる。
4年4月より現職。

させていただきました。県の先生方だけではなく多くの職員の方々にお世話になりました。一方、臨床の場でも多くのことを学び、多くの先生方やスタッフの皆さまにお世話になり、地域住民の方々にも成長させていただきました。もともとの性格から、さまざまなことを学びたいという気持ちが強くなり、そのおかげもあり「総合診療医としてどんな病気でも診る!」ということにやりがいを感じました。理由は自分でもよく分かりませんが、狭く深くよりも、できれば少しでも広く、少しでも深く学びたいという信念が自分に合っているように思えます。

臨床医後半〜現在

義務年限の終わり頃には、臨床医の「終活」として後輩の育成に力を発揮してまいります! 宣伝もさせていただきます、本シリーズでの任務も完了しましたので、この誌面の結びとさせていただきます。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございます。

「期待の若手シリーズ 私にも言わせて!」は、
全国保健所長会ホームページに
バックナンバーが掲載されています。

全国保健所長会 月刊公衆衛生情報

http://www.phcd.jp/update/archive_02_j_koushueisei_watashi.html